

私、好きじゃない人
と結婚します

赤松 青海

人 物

潮野 柚（25）メネア教徒

風見 隼人（25）メネア教徒

潮野 勝造（53）柚の父

潮野 道子（53）柚の母

加藤 文乃（42）神殿スタッフ

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件とは一切関係ありません。全て架空の設定です。

※また、特定の思想・信条を推奨する意図はありません。

○メネア教東京神殿・駐車場

白い大理石の建物。

「メネア教東京神殿」の看板。

駐車場に黒い車が停車し、潮野勝造

(53)が後部座席から出る。

潮野「よおし、ついた」

風見隼人(25)、運転席から下りて

さつさと進む潮見に着いていく。

風見「お義父さん、早いですよ」

潮野「私も経験してるから。風見君も今日は

私に任せなさい」

風見「はい、頼りにしてます」

潮野、急に立ち止まり、車に対し、

潮野「柚！何してるんだ！早く来い！」

風見「乗り物酔いでしょう。呼んできます」

風見、苦笑して車に駆け寄る。

○車内

潮野柚(25)、助手席で窓の外を呆

然と見ている。

蝶がひらひら舞うのが見える。

膝のスマホは「森田伸一郎」とのL I
N Eのトーク画面。

森田からの「さよなら。君との時間は
楽しかった」の履歴。

風見が窓を叩く音にはっとする。

柚、慌ててスマホを暗転させる。

柚「ごめんなさい。ぼーっとしてた」

風見、ドアを開けて手を差し出す。

柚、少しためらいながら手を取る。

○メネア教東京神殿・ロビー

神殿に続く赤い絨毯が敷かれている。

入口で加藤文乃（42）が出迎える。

潮野「すみません、予約した潮野です」

文乃「お待ちしておりました。この度、天婚

式を手配させて頂く加藤文乃です。まずは

ご天婚、おめでとうございます」

文乃、手を繋ぐ柚と風見にお辞儀。

風見、柚から手を離し、お辞儀する。

柚も遅れてお辞儀。

文乃「では早速ご案内します。こちらへ」

文乃に先導され、潮野と風見が歩く。

柚、風見の手を繋いでいた手を見る。

柚M「私、潮野柚は、この時初めて結婚相手の手に触れた」

○同・神殿内

聖壇の前に椅子の列が連なる。

文乃「式のメイン、聖約の儀では、聖壇の前で永遠の結びつきを誓い合います」

柚M「メネア教。世界に一千万人、日本に八万人いるとされるキリスト系宗教」

潮野と風見に遅れ、柚がついていく。

柚M「この宗教では結婚に特徴がある。自由恋愛の禁止と婚前交渉の禁止。偉い人が引き合わせた相手との結婚」

文乃、風見と柚を見、語気を強める。

文乃「ここでの誓いは主^{しゅ}への聖約です。その点、よくご理解ください」

潮野「メネアで離婚は許されん。主に祝福しゅくされた天婚を蔑ろにする行為だ。最近多い様だが。嘆かわしい！個人主義の末路だ！」

柚、唾を飲み、風見をチラリと見る。

風見、苦笑して潮野に相づちをうつ。

風見「……ええ。助け合うのが家族なのに」

柚 M「私の結婚相手、風見隼人さんと初めて会ったのは二週間前。たった3時間の食事会。それだけで、結婚が決まった」

柚、退屈そうにヒールを見つめる。

柚 M「彼について知ってるのは銀行マンって事、趣味が読書、好きな聖書の一節だけ」

○同・控え室

ドレッサーには様々なタイプのウエディングドレス。

文乃「この中からドレスをお選びいただけます。お客様はどれになさいますか？」

柚「すごい！いろんなのある……！」

柚、少し興奮気味にドレスを物色。

風見、柚の隣にたち、小声で、

風見「柚さんならどれも似合いそうです」

柚、照れた様子で風見を見上げる。

風見の顔はもうドレスを見ている。

柚「……ありがとうございます」

柚M「この人との距離が近づく気がしない」

× × ×

柚、プリンセスラインのドレスを着て、全面鏡の前に立つ。

潮野「良いんじゃないか？ どうだ？ 風見君」

柚、照れた笑顔で風見を見つめる。

風見、変わらない笑顔で拍手。

風見「はい、すごく似合ってます！ マグダラのマリアみたいです！」

柚「……ありがとうございます」

柚、ぎこちない笑顔になる。

柚M「……本当に距離が近づく気がしない」

○潮野家・玄関前（夜）

閑静な住宅街にある。

車が前に停車し、潮野と柚が降車。

潮野「今日はよかった。式が楽しみだよ」

風見「はい。じゃあ僕はこれで」

風見、柚に微笑みかけ、車を出す。

潮野道子（53）、玄関に出てくる。

道子「おかえり。ごめんね、仕事について行けなくて。いいドレス、選べた？」

柚「……うん」

潮野、弱々しい柚の声音に低い声で、

潮野「何か不満か？」

柚「いや！そんなこと……」

潮野「またお前は、私を裏切るのか？」

柚、何も言えず、目を伏せる。

潮野「主よ、娘の不義理をお許してください。

未だに主の言葉を理解していないのです」

潮野、ブツブツ言いながら家に入る。

道子、柚の肩を叩き、通りを指さす。

道子「柚。一緒にコンビニ行かない？」

○大通り沿い（夜）

柚・道子、連れ添って歩く。

道子「なんか久しぶり。こう歩くの」

柚「パピコ買ったよね。お父さんに内緒で。

でも捨てたゴミでバレて怒られた」

道子「仲間はずれが嫌だったのよ。そういう

ところは可愛いと思う」

柚「……ねえ、一つ聞いていい？」

道子「なあに、柚？」

柚「嫌じゃなかった？知らない人との結婚」

道子「そりゃ嫌よ。私も恋愛に憧れてたし」

柚「……やっぱり、そうだよね」

道子「だから、あなたが大学でお付き合いし

てたのがバレた時、何も言わなかった」

柚、動揺して立ち止まる。

道子「森田君だっけ。どこが好きだった？」

柚「……照れると、口を窄める所」

道子「口？キムタクみたいね」

柚「あと、笑顔がクシャッってなる所、おつり

の計算が苦手な所、……メネアのこと知っ

ても、変わらず、接してくれた所……」

柚、声を震わせて涙ぐむ。

道子「……今も森田君のこと好き？」

柚「……嫌い」

道子「何で？」

柚「嫌いにならないとダメだよ……！森田君から、別れてくれたんだから……！」

道子、柚を抱きしめる。

道子「それでいい！森田君との思い出ごと、風見さんと結婚しなさい！」

柚「でも……風見さんに申し訳ないよ！」

道子「そんなことない。風見さんの好きな所は、これから見つけていけば良い。結婚してから好きになるのも、案外アリよ」

柚、泣いて泣いて、へたり込む。

柚と道子の側に黒い車が停まる。

運転席のドアが開き、風見が現れる。

風見「柚さん？！大丈夫ですか？！」

柚「え、風見さん？！」

風見「へたり込む人が見えて、大丈夫かなと思ったら柚さんで、僕もびっくりで……」

柚「いや、その……大丈夫です」

道子「そうだ！二人でドライブ行きなさいよ。私は歩いて帰れるから」

柚「え?!」

風見、車を降り、助手席へと促す。

風見「……どうぞ」

○車内（夜）

風見が運転し、助手席に柚が座る。

風見「少しは楽になりました?」

柚「……はい」

風見、柚が握るスマホをチラ見。

風見「LINEって、どっちかが友達削除しても残るらしいですね。トーク履歴」

柚「え?」

風見「ありますよね。残ってほしい、宝物みたいな思い出って」

柚「……あの時、見てました?」

風見「あ、責めてないですよ。恋愛小説は僕も好きです。おあいこ様」

柚「……なんか意外。風見さんって決まりに
厳しいタイプだと思ってました」

風見「僕も不安です。お互いまだ知らないこ
と多いし、不足もあると思う。でもだから
こそ、一から築ける幸せもあると思う」

風見「照れて口を窄めながら小声で、
だから、よろしく。……その、柚」

柚、風見の様子を見て吹出す。

柚「……確かに、キムタクみたい」

風見「……僕は真面目なだけだな」

柚「ごめん！こちらこそ、隼人さん……！」

○メネア教東京神殿・神殿内

ウェディングドレスを着た柚、タキシ

ード姿の風見、聖壇前に並び立つ。

風見「私、風見隼人は、潮野柚さんと永遠の
契りを結びます」

柚「私、潮野柚は、風見隼人さんと永遠の契
りを結びます」

柚、風見と目が合い、笑い合う。

赤
松

青
海